

## ●感染性胃腸炎

平成27年の感染性胃腸炎の報告数は63,584例、前年より5,377例、7.8%減少した。小児科・眼科定点報告対象13疾患総報告数の40.8%を占め、第1位であった。定点あたり報告数は年平均6.00で、前年6.67より10.0%減少し、ほぼ平年並みの流行であった。

全国集計では報告数987,912例で、総報告数の40.6%を占め、定点あたり報告数は年平均5.92と前年6.15より減少した。

週別の定点あたり報告数は、第2週から徐々に増加し、第10週に前半のピークである9.16に達した。その後6～7を推移し、第25週以降は減少に転じ、第33週に年間最低値2.37となった。第43週より再び増加、第49週に年間最高値10.18に達した。全国集計では、第2週から増加し、第11週に8.24に達した。後半は第49週から増加し、大阪府よりやや遅い第51週に年間最高値10.71に達した。

月別報告数は、11月、3月、6月、12月、4月、2月の順に多かった。春から初夏に二峰性のピークを作り、夏から秋にかけて低値をとり、晩秋に再び増加し、冬にピークを持つ流行曲線は例年と同様であったが、前年と同様に冬のピークはやや低かった。

ブロック別にみると、定点あたり報告数が警報開始基準値20.0を超えたブロックはなく、④中河内の第49週17.80が最も高く、次いで⑤南河内の第49週17.25、③北河内の第10週17.00が高値であった。

ブロック別の定点あたり報告数の年平均は、⑤南河内9.18、④中河内8.83、⑦泉州7.84、③北河内7.57、⑨大阪市西部5.70、②三島5.45、⑧大阪市北部5.16、①豊能4.90、⑪大阪市南部3.44、⑩大阪市東部3.41、⑥堺市3.02の順であった。

年齢別報告数(0～9歳)は、1歳、2歳、3歳、4歳、5歳、0歳の順に多かった。0～4歳の報告数は34,185例で全体の53.8%を占めた。5～9歳が16,621例(26.1%)、10～14歳が5,229例(8.2%)、15歳以上が7,549例(11.9%)で、各年齢群の全体に占める割合は例年とほぼ同じであった。

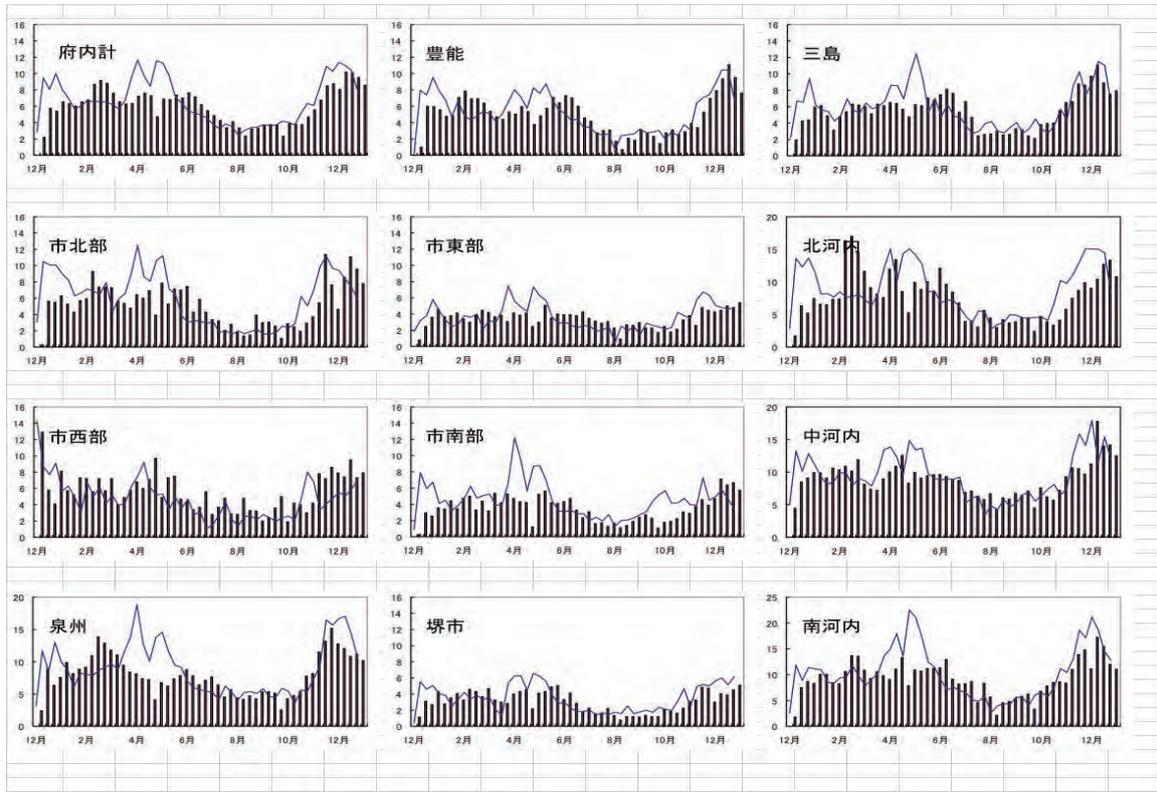
ウイルス検出は377検体のうち212検体が陽性、陽性率56.2%であった。病原体別でみると、ノロウイルスGⅡが88件(陽性検体の41.5%、うちノロウイルスGⅡ.17は5件)、A群ロタウイルスが43件(陽性検体の20.3%)、サポウイルスが23件(陽性検体の10.8%)で、この3種類のウイルスで全体の7割を占めた。

(文責：松浪)

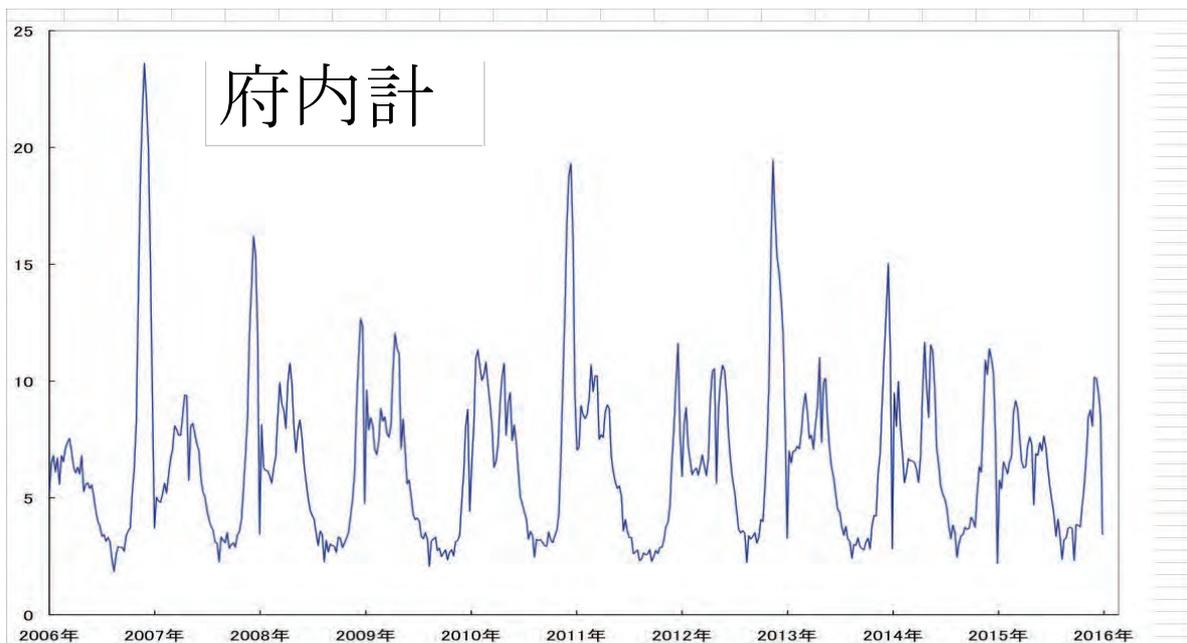
# 感染性胃腸炎

線 (H26年第1週～第52週)

棒 (H27年第1週～第53週)



線 (H18年第1週～H27年第53週)



●水痘

平成27年の水痘の報告数は、5,534例であった。総報告数（小児科・眼科定点報告対象疾患）の3.5%を占め、対象疾患中、感染性胃腸炎、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症に次いで第5位であった。定点あたり報告数の年平均は0.52で、前年（0.94）より44.7%減少した。全国集計では77,614例の報告で、総報告数の3.2%を占め、定点あたり報告数の年平均は0.46で前年（0.96）より52.1%減少した。

定点あたり報告数を週別にみると、第1週0.49から第2週に本年最高値となる1.17まで増加し、第3週0.44以降は0.35と0.67の間で推移した後、第26週0.61から増減を繰り返しながら本年最低値となる第36週0.25まで減少した。その後増減を繰り返しながら本年第2位の値となる第51週0.87まで増加し、その後第53週0.54まで減少した。全国集計では、本年最高値となる第2週1.10から第3週0.52まで減少し、第5週0.44以降は0.40から0.53の間で推移した後、第22週0.53から増減を繰り返しながら本年最低値となる第33週0.22まで減少した。第34週0.26から第41週0.27まではほぼ横ばいとなった後増加に転じ第51週0.87に達した。これは本年第2位の値であった。その後減少し第53週0.48となった。

定点あたり報告数の月別平均値は、12月、11月、1月、3月、4月、2月、6月、5月、10月、7月、9月、8月の順に高かった。例年の流行曲線は冬と春に二峰性のピークを作り、夏から秋にかけて低値をとるが、本年は冬のピークはあったものの過去10年間で最も低く、春にはピークを作らなかった。また夏から初秋にかけて低値であったのは例年通りであったが、最低値も過去10年間で最も低かった。

年齢別報告数（0～9歳）は、4歳児、3歳児、5歳児、2歳児、1歳児、6歳児、7歳児、0歳児、8歳児、9歳児の順に多かった。0～4歳の報告数は3,179例で全体の57.4%を占め、昨年（68.4%）より割合が減少した。逆に5～9歳の報告数は2,068例で37.4%を占め昨年（28.2%）より割合が増加した。10～14歳及び15歳以上の報告数は各々220例（4.0%）及び67例（1.2%）で、いずれも昨年（各々2.6%及び0.8%）より割合が増加した。

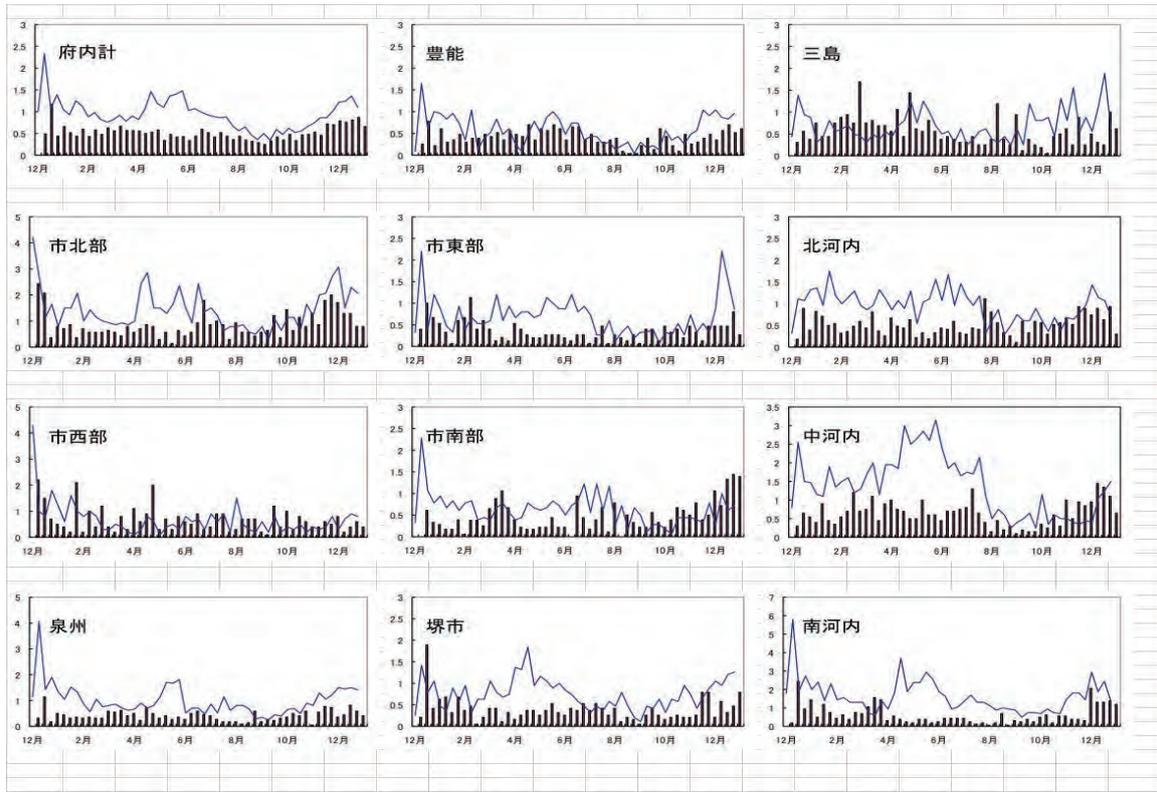
定点あたり報告数の年平均をブロック別にみると、⑧大阪市北部0.88、⑨大阪市西部0.69、④中河内0.64、⑤南河内0.62、②三島0.56、③北河内0.52、⑪大阪市南部0.46、①豊能および⑦泉州0.42、⑥堺市0.39、⑩大阪市東部0.35の順であった。

検体は咽頭拭い液が1件提出されたが、ウイルスは検出されなかった。（文責：吉田）

水痘

線 (H26年第1週～第52週)

棒 (H27年第1週～第53週)



線 (H18年第1週～H27年第53週)

